

○教師既に日雇職人として賃銀の爲にのみ教場に出るのであるから、是の事情を知り抜いて居る生徒は、また日雇職人として其の師を待遇して居るのも自然の勢ひで致し方が無いのだ。學校も教師も生徒も、皆其の心懸けが斯様に間違つて居る。教育てふものは斯んな事情の下に成功せられべきものか如何かは言ふまでも無い事だ。それに可笑い事には、今の私立學校の連中は、官立學校には人物教育が行はれて居ないなどとはざいて居るが、抱腹絶倒の至りだ。

○斯んな風に私立學校の教育が墮落したのは、抑、學校設立者が教育を商賣と心得て居るからだ。其の證據には、府下の私立學校は残らず生徒の月謝乃至講義録で維持して居るので、それに校主校長以下の人には何分の利益が入るのである。生徒の月謝で維持が出来、おまけに餘益まである様な學校が、なんで教育などすることが出来やうぞ。一體凡ての世の中の事業の中で、教育事業は凡て高價なもの一つだ。亞米利加の大學などの例を見るが好い。基本金三十萬圓で三大學を造るなどと云ふ様なことが夢にも考へられたものでは無い。日本の不完全な教育ですら、たつた一つの高等學校に少くとも年々六七萬圓は費つて居る。我輩

は私立學校なるものが日本の青年、日本の教育を毒することの甚だ大なるものなることを想はずには居られない。

○斯様に言ふと、如何にも我輩は官立學校の辯護をする如く聞えるが、罵倒先生の材料は官立學校にも山の如くある。何れ追々と述べてやう。

(明治三十五年八月)

○官位や爵祿は帝王の一呼吸で如何様にも製造の出来るものだが、唯、眞の人のみは唯、神様のみ是れを造る事が出来るのだ。今の世に、やれ華族の、殿様の、と勿體らしい名前は腐る程あるが、禪一貫の風裸の儘で、眞の人たり得るものが幾何あるか。

○カーライルは英國女皇の裸のまゝを想像したことがあつたが、我輩はトテモ我邦の貴族の裸體を想像するの勇氣が無い。彼等の十中の九分九厘は爵位の拵へた人間で、人間から出来た爵位では無い。謂はば爵位の入れ物の様なものだ。

○人並の智も徳もあるではなく、世の中の味などは頓と解らず、犬猫同様に、たゞ何とな

く生ひ立つて、やがて物心が附くと殿様あつかひにせらるゝ自分が、他人よりも上等な人間でもあるかの様に何の譯もなく信じ、本来ならば道行くにも人目を恥ぢて歩くべきに、黒塗の馬車の中から世を我物顔に瞰下して居る其の態は、可笑しいやら、氣の毒やら、呆れて物が言へない。得て斯う云ふ奴等は、人を人とも思はず、平生従者に御無理御尤もと册かれて居る癖を其儘に、凡ての人に振舞はすものだ。對手も狂犬にはさはらぬ様に、大抵にあしらつて置くと、御當人ひどく慢じて、世の中は斯うして通れるものと思ひ込んで、陸では皆人の嗤ふにも心附かず、トウ／＼二度とは無い一生を無我夢中で暮して了ふ。此れでも人間かと思ふと他事ながら涙が零れる。

○金持ちなどの多数もまづ是の馬鹿殿様と大抵似たり寄つたりのものだ。世の中は金が物言ふと心得たまでは好いが、扱て金に物を言はせる當人がドレ程エラク成るかに心附かぬとは笑止の至りだ。金持に御辭儀をしたり追従をしたりするのは、言ふまでもなく其の人にすれば無く其の金にするのだ。人は權兵衛であらうが、與太郎であらうが、そんなことは如何でも好いのであるのに、金持らの御當人は、何か自分に特別の徳でもある様に自惚れて、

さて浮世の習ひに貧乏してから、今更ら人情の輕薄などを歎くなど、随分お目出度く出来て居ると言はなければならぬ。

○金でお辭儀をさせるもの、金にお辭儀をするもの、共に金より外に世に貴むべき物のあることを知らぬ輩で、例へば牛肉の外に美味を知らぬ犬と餘り遠くはない。こんな奴等が世の中に幾千萬人あつたとて、我輩から見れば瓦石の累々として轉ろがつて居ると毫も違ひは無い。

○平沼專藏も金さへあれば國民の代表者となる事が出来る世の中では無いか。あゝ金か金か。是の人生を腐敗せしめ、墮落せしめ、この青春の野原を荒寥たる沙漠にするのは皆金の力だ。人はだん／＼人ではなくなつて金の蟲になる。斯んな世の中に文藝も宗教もあつたものでは無い。

○併し、考へて見れば可哀想なものだ。受け難き人身を受けて、この人生の眞味をも解し得ず、虚榮と虚飾との間に何の自覺も意識もなく、茫々焉として長くもない一生を過ごすとは、所謂醉生夢死とは是の如き生活を指すのであらう。

○世が進むに人が殖えるとは、これは頭数の話して、まことの人間は才明の進歩と逆比例をして減つて行くのだ。

(明治三十五年九月)

○此頃本願寺の騒動に就て、世間では國家の大事件でもある様に色々世話を焼く人があ
るが、あんなものは抛つて置くが好いでは無いか。減びるがまゝに減ほした方が、ドレ程世
の中の爲になるか知れないのだ。

○人は宗教界の出来事と云ふけれども、今の眞宗は、最早や宗教では無い。本願寺は地方
の一豪家に過ぎない。今度の争ひなども、一私人の家に起つた相續争ひの様なもので、債主
や番頭の頭には響かうが、何も國民が關係すべきことでは無いのだ。

○本願寺の様なもの減びたとて日本の宗教界は何の影響を受けるものか。迷信者の毛綱
で繋いである寺院の滅亡は、即ち迷信者其人の大いなる救ひである外、國民の信仰に何の關
係もない。我輩は老法主君が益々健全で、現在の法位に在りて、ますます盛んに其の淫逸と奢

侈と借金とを高め、是の惡徳、不義、僞善、迷信より成れる舊佛教の死骸が一日も早く此の
世の外に埋め去られむことを切に希望する。

○可笑いのは改革派と稱する輩だ。今の本願寺を如何改革するのか。人を極樂に導くと云
ふのは聞えるが、其の爲に金錢を要すると云ふは何の意味か。然しながら是の無意義を省い
て此の本願寺が如何して維持が出来るものか。所謂改革派が眞に宗教の爲に盡す寸志だにあ
るならば、何も是の腐敗墮落を極めた老賣女の様な宗門に嚙り附かずに、別に一新宗派を樹
てるが好いでは無いか。

○今度の改革派の中に、世間で所謂學者派と云ふのがあるが、是れ亦意氣地無し集りだ。
南條だの清澤だのと云ふ連中は白川黨の騒ぎの時に、那んな立派なことを言ひながら、渥美
の代りに石川が入れば、其れで一言もなく泣寝入りになつたでは無いか。全であれは渥美排
斥運動で、宗門の爲に何の規畫する所も貢獻する所も無かつた。斯んな意氣地無し連中に
何が出来るものか。それで學者で候の識者で候のと云つたところで、宗門、否日本の宗教の
爲に何の足しに爲るものか。是の連中も矢張り博識を賣り物にして、迷信者の奉納金のお裾

分けを目的とする我利々々坊主と何の異なる所がない。

○一體眞宗と云ふ宗旨が馬鹿氣極まつたものだ。ドンな悪事をドレ程行つても、一念だにも佛に歸依すれば、それで極樂に往けるとは調法極まるが、不道理も亦極まつた教と云はなければならぬ。彌陀の四十八願が無量無邊の慈悲であつたとて、是れではあまり蟲が好過ぎはすまいか。世間の道德的因果を無視して、吾々の倫理上の理想に背くことは是の如く大なるものは無い。かく云ふと、眞宗僧侶は、過去世に於ける如來の誓願に乗るのであるから、因果はおのづから其間に存するなどと仰しやるが、理窟と羽織の紐は如何様にでもつくものとは云ひながら、斯んな不窟窟が今時通つて耐るものか。

○全體淨土眞宗の經典たる三部經と云ふものは、曇鸞、道綽、善導以來、いろ／＼の勿體が付き纏つて居るが、實は淺薄極まつたものだ。其中で觀經には一寸面白いところがあるが、他は平々凡々で何の高さも深さも無いものだ。強いて取得を求むるならば、法主が妾を置くことや、愚民を誑かして金錢を捲上げる事などを認可して無い所でもあるだらうが、是れを法華經などに較べると、小供と大人との違ひは慥かにある。

○同じ念佛宗でも、融通念佛などは中々面白くもあり、又高尚でもあるが、眞宗の所謂純他力の念佛と來ては、トントお話にならない。淨土宗が念佛を行と認めて多少の他力的分子を容したのは、眞宗よりイクラか尤もらしい。つまりは成典を奇貨として人の弱點に投じた教で、其の昔し釋尊が傳へられた禁慾、解脫の原始佛教の面目は露ばかりも傳はつて居ない。今日眞宗僧侶が自ら佛教徒と稱するなどは僭越の極だ。

○所謂本願寺の如き淫祠は一日も早く亡びるが好い。若しも時勢に大いなる力があるならば、是非とも亡ほさなければならぬ筈だ。

(明治三十五年九月)

編者云

此篇雜誌「太平洋」に掲げられ、終りに(まだある)と記したれども、續稿を見ず。著者、病漸く進みしが爲か。

詹々錄

○世人は何故に他の罪惡を知らむことを好む乎。祕密は祕密として永く暗中に葬らしめよ。抑、矯風なるものは人を傷キツぐることに無くして成し遂げ得ざるものなる乎。

○紀念像の位置は、須らく其の人物の歴史と密接の關係を有するの地たるべし。南洲の銅像を上野公園に樹てたるの不倫なる、吾人既に説きぬ。今や又日蓮像に就て一言せざるべからず。

○太宰府と日蓮との關係がある。安國論の一事を以て、元寇の歴史に附會するが如きは殆ど兒戯に類す。

○日蓮にして紀念像を有せざるべからずとせば、其地は安房可なり、鎌倉可なり、佐渡可也、身延、池上、亦可也。何爲れぞ筑紫太宰府を累はさむや。將た又、日本國民は元寇擊退

の紀念として日蓮像を有するを願ふべき乎。

○日蓮像建立者は宣言して、元寇紀念の爲と呼ぶに非ずや。元寇紀念の爲ならば、忠臣義士何ぞ限らむ、是の國家の大事を表彰せむが爲に、何ぞ一に日蓮氏を累はさむや。

○安國論の一事を附會して日蓮の像を太宰府に建て、以て元寇の紀念と稱するは、即ち日本の忠臣義士、別して伊勢の神靈を犯し奉る者に非ずや、如何。

○我邦人は嗜好と品性とを混同するの風あり、誹詆嘲罵の由來する所、是れに基くもの妙からざるを認む、是れ弊也。

○例へば弊衣襦袍に安んずるの人、他の輕裘綺衣を着くるを見れば、目して邊幅を飾る輕薄兒となす。而して後者、前者を詆りて鄙吝禮に嫻はざる粗樸漢となす。然れども是れ嗜好の差別のみ、品性の高下に非ざる也。

○品性時に嗜好に關せざるにあらず。然れども若し一切の嗜好盡く品性によりて律せらるべくむば、社會は單調沙漠の如くならむのみ。

○畢竟互ひに個人的嗜好を認容するの雅量なきは、本邦人の一僻性也。もろくの無意義の猜疑、嫉妬、憎惡、争鬭、是れより來るもの尠からず。

○「我の日本は三百年後の日本也」との内村氏の抱負は、吾人の眞に敬服する所也。然れども吾人敢て氏に告げむ、三百年後を以て事とするの人は、先づ今日を以て事とせざるべからず。事物の發達は、飛躍を許さざれば也。

(明治三十二年六月)

○近來、豊國祭を初めとして、歴史上の英雄の爲に紀念祭を催すことが連りに流行する。事のよしあしは暫く措いて、其の旨趣の分明ならざると、方法の適切ならざるとは、切に當事者并に國民の注意を促すべきである。

○英雄の紀念を國民間に持續するは、士氣を鼓舞し、風教を振作する上に於て多少の利益あることは疑ふべからざることである。併しながら其の方法として普通神佛的の祭典を行ひて得たりとするは、下民を迷信に導く計りで、恐らく英雄の事業を向慕せしむる紀念の本旨

には稱はざる事ではあるまいか。

○近い例しが、兵庫の楠公社である、又は北野の天滿宮である。是の二社は多數國民にとりて、無病息災の神様と云ふより外に、幾何の意味があるであらうか。日本忠良の鑑と云ふ様な考は殆ど見ることを得ぬではないか。

○最も憂ふべきは、地方人民が其の土地に關係ある英雄の爲に、商賣的に紀念祭を執行する悪風である。紀念祭の美名の下に寄附金を募り廣告を爲し、附近の鐵道汽船と割引の特約を結び、地方廳の幫助を得、百方力を盡して人寄せの計畫をする、而して目的は何れ旅客の懐である。是の如きは一種の興行にして、紀念祭の美はしき精神とは頗る遠かれるものである。近年是の種の紀念祭が尠からず見受けらるゝは、果して祝すべき事であらうか。

○兎に角、紀念祭の方法が、イマ少し高尚に、眞摯に、イマ少し有効に、且つ非商賣的に計畫せらるゝ事に就ては、當事者たるものと國民とがイマ少し熟考すべきである。

○祭りと言へば、最も趣味ある無邪氣な、祭りらしき祭りの年を追ふて寂れゆくは、悲しむべき現象では無いか。人は報酬無しでは神の祭りをだに營まぬまでに實利主義に傾いたのか。

以太利のサン・ジ・バンニの祭などを今日より想像すれば、實に神往の情に堪へざる事である。

○所詮今の世の人は餘り眞面目に、餘りに理窟ほく又餘りに道義的である。人生は夢で無^いだけ^にそれ^{だけ}の^夢の^如く^に戯^れ遊^ぶこ^とが^大い^なる^慰藉^であ^る。餘^りに^眞面^目な^らば^こそ^偽善^も起^るの^であ^るま^いか[。]餘^りに^理窟^ほく^餘り^に道^義的^なる^丈に^詐欺^も、不^徳も、それ^丈け^多い^ので^ある^まい^か。

○去る三日の夜、外山博士は「基督教信者の覺悟」と云ふ題で、青年會館で獨り演説を試みた。我輩も聴衆の一人として、非常なる喝采聲裡に三時間の長演説を終りて降壇せられたる博士の満足の分配に預つた者である。其の論旨は暫く措いて、其の演説振りに就て所見を述べて見やうか。

○我輩は政治家諸君の演説を聞く機會に遭遇すること甚だ稀なるが故に、比較して言ふことが出来ないが、政治社會以外には、雄辯家として博士に匹敵するもの、先づ五人とは數へ難い事であらう。博士の演説は他の點は兎に角、其の風格の堂々たることに於ては、儘に當代のオレーションである。

○博士の演説を重からしむる第一の要素は、聲である。——新聞などでは破鐘と綽名せらるゝ、幅もあり、高さもあり、深さもあり、音樂ならばベースよりアルトまで、まづ融通のきくべき、日本人としては實に珍らしき聲である。凡そ發聲の苦しきさうな、聲量の乏しきうな演説は、演説者其人が何となう見すほらしく、何となう淺墓に見えて、其の說の内容に傾聴せしむる丈の餘力を有ぬのであるが、博士の演説に於ては是の如き憂は毫頭無い。あの遠雷の如きグレーブな調子にて、「諸君」と呼び懸けらるゝ時、吾々は魔力にでも遇ふた時の如く、吾々の感情の上に一種の束縛を感じるのである。

○然れども博士の演説は、恐らくは能辯と稱せらるべきものでは無からう。感情的、煽揚的、威嚇的の部分に於ては實に恐ろしい力を有つて居る代りに、敘述的部分に於ては寧ろ聞きにくい迄に拙いこともあるのである。畢竟博士の辯舌は些細なる事の敘述には餘りに重くらしい。ナレーションに必要な、輕快自在の趣が割合に乏しいと云ふ批評は、恐らくは免れ

ないであらう。

○併しながら、感情的若しくは煽揚的の處になれば、其の効果は實に目覺ましきものである。あの抑揚自在にして無限の力の籠れる朗々たる音吐は、あの自然にして熱心に、且つ尤も巧妙なるヂュスチュアと相待つて、滿堂の人心を掀翻し、煽揚するに於て、殆ど遺憾無き効果を奏するのである。ナレチープの場合には、時として晦澁にすら聞えたる辯舌も、何時しか最も暢達なる快辯となり、混々として口を衝いて出る。あはれ革命時代の煽揚家は、是の種の演説によりて如何なる事業を爲したるかを回想すれば、吾々は演説の勢力の實に恐ろしきことを痛切に感ずるのである。

○威嚇に於て成功することも、慥に博士の演説の一特長である。訓誡もしくは譴責に關するものある時は、吾々は一種抵抗すべからざる壓力を感じ、覺えず襟を正すに至る。是れ強ちに論旨の如何によると謂はむよりは、寧ろ其の有力なる音吐の中に含有せる一種の胃し難き威嚇が與つて力あることであらう。

○博士の演説の長所は、要するに感情的の部分に存することは博士自らも認めらるゝ所で

あらう。其の成功の一大要素は、音聲に存することは言ふまでも無いが、其の風度の如何にも自然に眞摯であることも、人を動かす上に於て最も有力なる要素である。其の表面に於て毫も修飾の痕跡を留めずして、而も是の境地に達するを得せしめたる其の根蒂の練磨の如何ばかり深大なるかは、蓋し想像すべきであらう。

○一言すれば、博士の演説は政治的煽揚家の演説である。

(明治三十二年七月)

無題錄

○今の世の學者は殆ど全く官學の中に網羅せられたるが如し。社會は官學の外に學者を養ふ能はざる乎。學者は官學の外に其の身を立つる能はざる乎。

○英のスペンサー氏は大學の教授にあらず、獨のハルトマン氏は一室に籠居するのみ。而も尙ほ儼として官學以外に於て學術界の一重鎮を爲す。是の如くにして初めて、學術國と稱すべし。

○華族の禮遇停止續々として現はる。驚くを已めよ、貴族院は宗教法案の試石に遇ふて既に其の腐敗を證據立てたるに非ずや。華族を如何に處分すべきかは慥に刻下の一緊急問題也。

○大學生の不品行は誠に慨すべきも、教授先輩の中に通人粹士あることは更に大に慨すべきに非ずや。待合の奥座敷に警吏の誰何に辱められたる博士教授の如き、貴族に重し。

○思ひ出の記

近刊の小説中、やゝ異彩あるものは徳富蘆花生が『思ひ出の記』なるべし。五百頁の紙幅は必ずしも珍とするに足らざるも、文情の高潔なる、今の小説界に於て稀に見る所也。全篇の結構、平淡に過ぎて波瀾に乏しきを憾むべしと雖も、樂天和平の間に於て能く人生の歸趣を描くところ、太だ及び易からず。加ふるに深き信仰あり、高き道念あり、而して詩趣亦乏しからず。是れを無趣味、沒理想にして唯、紙背に作家自らの陋劣なる品性を暴露するに過ぎざる今の駄小説に較ぶれば、殆ど同日の談に非ざるを覺ゆ。

(明治三十四年四月)

○美術と工藝

將來の美術は益々工藝と接近せむことを要す。是の兩者の提携は本邦美術の特色にして、又其の長所也。二千年の歴史、明に是れを證す。敢て當來美術の當事者に告ぐ。必要の地盤に立てるものに非ざれば、必要以上に發達すること能はず。

○自由美術

漫りに自由美術と言ふ勿れ、ミケランジェロ、ラファエレの美術に果して自由なるものありしや。工藝を卑しむ、裝飾を卑しむ、而して美術あれと云ふもの、是れ美術無かれと言ふ者也。價値は要求に伴ふ。分類は空名のみ。

(明治三十四年十月)

雑談

○内田魯庵君の近作は何れの小説雑誌にも出て居るが、何れもそれ／＼に面白い。我輩は魯庵君の小説と云つたら大抵逃さずに讀むで居る。讀み了つて深く動かされた例は少いが、少くとも讀むで居る中は面白い。慾には讀むで了つた後にも何か残る様な作が讀ませて貰ひたいものだ。

○餘り深酷とも剗切とも思はぬが、現代の社會を種々の方面から描寫することに於て、君は確かに今の小説家中に一頭地を抽むで居る。併し我輩は斯う思ふのだ、若し假りに君の常に抱いて居る魯庵的社會觀を虚しうして十分に寫實の筆を伸したならば、其の結果は今日見る所のものよりも數層大なるものがありはしまいか。我輩は決して傾向小説を否定する者でないが、魯庵君の有望なる前途に對して是のトライアルをお勧めするものである。

○宙外君の『めぐる泡』を(著者に内證だが)澁々讀むだ。君が年來苦心の作と聞いただ

けに其の失望も大きかつた。我輩に言はせると、君の書き方はドーモ執拗つこい。つまりぬ所をながくと書き立てるあたりは今までの天外君に似て居るが、急所々々を抑へて筆を省く遣り方は天外君に及ばざること遠しだ。それに君の描く主人公が毎々女の腐つたのの様なには殆ど閉口だ。是れで無ければまさか主観的描法とやらが出来ぬでもなからうに。

○マキシム・ゴルキの評論が民友社から出た。由來露西亞と云ふ國は、とかく文明の謀叛者を出す國であるが、このゴルキは又格別なものだ。世人は野獸的、ゴルキなどと何も驚き騒ぐにも及ぶまい。彼等は、彼等の呪咀する人物によりて漸く自己の意證に近づきつゝあるのである。

○罪無き者は審判の聲を恐るゝものではない。ニイチェやゴルキを人が刑事調査の様に嫌がるのは、皆己れに犯せる罪があるからだ。

○其は兎に角、世上の文學者は深くゴルキに顧みる所あつて然るべしだ。彼れは二十餘年の間浮浪の生活をした一無學漢であつた。然し彼れは是の間に天地人生の中に鏤刻せられた

る全文を其の涙と血とで讀みわけたのである。文學者としての彼れの成功は實に是の身讀體達の大教育に原つたのだが、書物を讀むたり講義を聴いたりして、それで是の世の事が獨り解るものなら、ゴルキは今日でも矢張り一浮浪漢であつたであらう。

(明治三十五年七月)

○晩翠の『亞細亞大陸回顧の歌』と云ふのが最近の帝國文學に現はれたが、これ程の題目をこれ程までにやつて退けたのは流石に晩翠だ。「金光まばゆき三千の伽藍」と云ふあたりから「八億亞細亞の民をゐて、帝座のもとに俯せよとや」と結んだところなどは、是の詩人の獨得の壇場と云ふべきだ。是の歌がその一部を成して居る『東海游子吟』と云ふのは、想ふにバイロンの『チャイルド、ハロルド』の様なものではあるまいか。

○日本の畫家が、三十になるやならず早く既に大家となり濟ますのは如何にも早や過ぎる。苟も一藝一學に身を立て、門戸を天下に張ることが、左様に容易く出来る譯のもので

はない。

○それから老大家となつても、既に得たる名をたよりに、碌に骨を折つた作も出さずに、刷毛先のゴマカシ畫をのみ書いてお茶を濁すと云ふ様な薄弱な風習は外國には決して無い。これも亦日本美術界の一宿弊と云はねばならぬ。

○理窟を言へば、眞正の美術家は理想の爲に生きて居るべき筈のものであるから、命のあらむかぎりは是の理想の實現に盡して日も亦足らずとすべきである。それに大家の名を得れば一生の能事終れるかの様に、頓に生氣活動を失ふの觀あるは、畢竟其の道に盡す赤心の足らざるが爲だ。言ひ換ふれば眞正の美術家でないが爲だ。我輩の眼から見れば、日本には美術家の假面を被れる商人や俗物が多くて、眞の美術家が甚だ少ない。

○理想のある處には常に進歩がある。是に於てか一生は断えざる戮力の連鎖となるのだ。我邦の雅邦先生などの老い方は餘りに早いといはなければならぬ。(明治三十五年八月)

○扱て秋は來た。天の色は澄み渡つて居るが、人の呼吸には是からそろ／＼痛みを感じる

のだ。天地の色は老いすして人間の世は移らふと詩人は歌つたが、人は季節の變る毎に其の身の衰へを今更の様に感ずる。

○一部俳壇の泰斗と仰がれた正岡子規君は遂に亡くなられた。八年の永き病褥に一日も風雅の筆を休めず、墨汁一滴に、病牀六尺に、常に斯界を指導せられたる其の志の篤き、實に敬服の外は無い。三十六歳は此世にて短命ではあらうが、人の眞の齡は其の事業を以て計るものとすれば、君の如きは長壽者の一人と言つてもよい。世間の人は徒らに君の短命を哀しむをやめて、己れの長壽に恥ぢざる様に自ら省みるが好からう。

○先には「ニイチュの學說」と云ふ書物が出たが、今度は又「孔子の學說」と云ふのが現はれた。あゝ學說かく、文教の流れは徒らに理辯に泥み、先哲の遺韻は空しく文字の間に没る。是の學風の革められざる限りは徳教の刷新などは思ひも寄らぬことだ。

○前號の本誌に(註)掲げられた眉山君の「野人」と云ふ小説は、中ほどまでは中々思ひ附も

能くシチュエーションも巧みに構へられたが、扱て末段に至つて老爺の無意味なる發狂の爲に何物にもならず了つたのは、かへすくも遺憾であつた。

○國家は頼りなき老農夫より其の一人息子を國家の爲と稱して兵役に就かしめ、戰場に臨ましめ、敵弾に死せしめた。郷黨隣保はみなく國家の爲と稱して一人息子の戦死の爲に老農夫を祝した。學校の教育家は國家の爲に討死せる兵士は、上杉謙信よりも武田信玄よりもえらいと言つて老農夫を喜ばせた。然しながら死せる信玄を子に持たうよりは、一人息子の生きて歸つた方が如何程老農夫にとりて喜ばしかつたであらうか。

○人は國家の爲と云ふ、成程國家は有難いものでもあらう。自分は何の故とも知らぬが、兎に角其の子を國家の爲に捧けたのが國民とやらの本分であつたであらう。然しながら、一人息子の殺されたのは如何にもつらい。戦争だになくば、國家の爲と云ふことだに無くば、我が子は無事息災であり得たものを。是の現在の悲みはトテも國家の爲と云ふ様な聲ばかりでは打消すことが出来ぬ。斯うなれば愚なる身には疑ひも起る。何故國家と云ふものは、我等の杖柱とも頼む一人息子をまでも奪ひ去つて、そして是れを戰場に死せしむるのであらうか。

か。——「野人」に描かれた老農夫は斯くまで思ひつめたのである。

○眉山君は何故に是の好題目に對して更に一開展を試みなかつたのであるか。老農夫を狂せしむるは必ずしも悪くは無い、唯、其の狂せしめ様が如何にも無意味であるのは、かへすがへすも残念であつた。

○頓機翁物語が英學新報社から出た。是れは嘗に英學書生の必讀書であるばかりではない。今の道學先生達の是非一度は讀まなければならぬ書だ。併しながら讀み了つてドンやバンザを笑つてはならぬ。我輩の眼から見れば、先生達の多數は皆是の物語の主人公に近いのである。

○湯淺吉郎君の新體詩集『半月集』は、近時の出版物の中で一異彩を放つて居る。殊に古英雄の一篇が、外山、井上諸氏の新體詩鈔に先だつこと數年の作であると云ふ事實は、明治文學史の一資料として注目すべきことである。

○總じて湯淺君の詩體は穩やかな、角のない、温乎とした所に長所がある。其の題目は、

例へば、天地初發と云ふ様な崇大雄渾のものより百猿舞と云ふ様な諧謔洒落のものに至るまで、其の範圍は頗る廣いが、其の用語格調は概して平穩閑雅の趣があると思はれる。其の思想に於ても強いて怪奇を衒ひ力めて清新を装ふの跡は絶えて無く、雍々として堂上に歌ふの概がある。されば紅恨紫怨を喜び、變幻怪奇を好む者より見れば、或は單調平凡の詆りを被るかも知れぬが、君の本領は居然として此の間に、おのづから一家を成して居る。

○此の『半月集』の卷頭に故大西祝君の天地初發に對する批評を載せてあるが、まことに面白い。大西君は本來哲學者であつたが、文藝の上にも深大なる素養を有つて居られた人で、其の文學上の批評は見るべきものが頗る多かつた。嘗に批評家であつたばかりで無く、操山と號して好んで新體詩を作られた。當時の『國民の友』を讀める人は必ず是の事を憶ひ起すであらう。

○あゝ是の大西君の故人となられてから既に二年を経た。學者は君の後に年毎に殖えるが文藝宗教の上に深き趣味を有ち、一個の人として思想界の儀表となる如き人は未だ一人も見當らない。君は道學先生の如く修身道德を殊更に説かなかつたが、君が人としての力に活ける感化を受けた無數の青年は今日尙ほ君の遺恩を感謝して居る。君は所謂革新家の如く世の腐敗を慷慨して其の救済を叫ばなかつたが、君の周圍には世の汚れを清むべき青年の團體が常に力を得つゝあつた。あゝ吾々は今に及びて是の得難き先輩の遺風を慕ふの情に勝へないのである。

○大西君は又京都に於ける文科大学の組織者であつた。同大學も來年より愈々開かれるであらうが、君に代りて誰が組織者となるであらうか。新らしき文科大学は如何様に構成せらるゝであらうか。實に懸念の至りだ。想へば大西君の死によりて日本は一個の學者、一個の人物を失ひたるのみならず、又大學教育上の一偉才を失つたのである。——『半月集』の序文の事からツイ返らぬ追懷に流れた。

○此頃は面白い小説は頓と出ない様だ。太陽には小説の批評が出ないと曰ふ人があるが、それは批評すべき新作が出ないからで、我輩が好んで出さぬ譯では決して無い。喩へば爰にクワイプスの様な小説が春陽堂から發刊せられたとすれば、我輩は五十頁位の批評をば、

篇章段落堂々と二號にも三號にも亘つて必ず掲載したであらう。それが疑はしいなら試みに作つて出して見るが好い。

○世間では、我輩は病氣の爲に文藝上の議論をする氣が無いなどと言ふ人もあるが、病氣であらうが何であらうが、筆を持つて居る以上は書くべきことは屹度書く。何か我輩に不満があつて、當面に議論を挑む人があらば、其の議論にして應ずべき理由ある限りは必ず應ずる。

(明治三十五年十月)

○エミール・ゾラもとうとう彼の世の人となつた。あゝ英物！、世界は是の如き人物を失ふごとに一つの光明を失ふのだ。其の生を禍とすべき人の斯くの如く多き世の中で、偉人の獨り荒然として逝くのは實に痛ましい。

○イブゼンもトルストイも、類輪もはや事に勝へず、ゴルキは可愛さうに肺病に悩んで居る。歐洲文壇も蓋し遠からずして其の局面に多少の變化を見ることであらう。

○竹風君の『あらひ髪』は、蓋し著者が諷誦自ら感むべき底のもので、今の時、木に上せて世に公にするもので無かつたかも知れぬ。然しながら、著者が一氣筆を呵して三日にして成したと云ふに至つては、其の文才實に驚くべきものと謂はなければならぬ。若し能く此の文才を陶冶して更に人生の研究を重ねたならば、他日の造詣必ず見るべきものがあらうと信ずる。竹風君たるもの自ら信じて可なりである。

○凡そ一氣感激の文には體制文字以外に必ず人を動かす所があるものである。所謂感極まつて而して哭すと云ふ様な、最も確的に人の肺腑をつらぬく斷腸の文字があるものである。然るに怪しむべきことは『あらひ髪』には是の如き文字が一として見出し得られぬ。其の事柄にこそ曲折もあれ、波瀾もあれ、其の行文の意氣は平板流暢にして毫も感奮激越の趣がない。やがては人生の大悲哀に陥り、自殺によりて此の世に打勝たうとする出見速雄、其人の精神に感孚せられたる著者の筆としては、極めて情熱に乏しいと謂はなければならぬ。著者は果してゲーテの所謂『まことの憎み』があつて其の筆を執つたのであるか。或はハイネの如く自己の經歷を第三者の地位より觀て、冷然としてそれを批評する態度に出たのであるか。

著者にして若し將來作家として世に出づる覺悟があるならば、是の點に就て明瞭なる自覺を有さなければならぬと我輩は思ふのである。

○殊に我輩が是の『あらひ髪』に於て最も遺憾とするのは、其の文體や、詞藻や、結構などの點よりも、寧ろ主人公たる出見の行爲を是認するに足るべき十分の理由の言ひ表はれざる一點にある。我が友竹風は戯作者ではない、東隣西家の俚談を寫し出だして小説と稱する所謂寫實家の一輩で無い。其の作には必ずや主張がなければならぬ。而して其の主張をば彼は是の『あらひ髪』に於て何處に表はして居るか。出見は世間の非難を被り、友人の忠言を受け、其の老父の苦諫を耳にしても、自家從來の行爲に對して一點悔悟の念を起し得ない。起し得ないのみならず、自己の中心には飽く迄是れを是認して居る。著者の主張、大きく言へば人生觀は、是の點に集中して居るのである。是の一段即ち是れは一篇の精神主腦である。是れ無くむば『あらひ髪』の一篇は徒らに紅恨紫怨を物語れる一戀愛小説たるに過ぎない。著者が是の點に就て十分の自覺を有せることは、我輩の堅く信じて疑はざる所である。

○然るに、事實に於て『あらひ髪』は殆ど是の點を閉却して居るの觀あるは實に不思議である。「己れには如何にしても後悔の念が浮ばぬ」とばかりにて、何故に悔ゆることを知らざるかの肝腎な理由に至つては一言も述ぶる所がない。是の如くにして出見の行爲は、全く其のジャスチフ・ケーションを失ひ、『あらひ髪』の一篇も亦茲に全く其の精神を失ひ、著者の作意も全く空茫に歸して了つたのである。あゝ文字や、體制や、竹風にとりて何物でも無い。是の精神、是の主張にして遺憾なく發揮せられたらむには、『あらひ髪』は其あらゆる缺點を以てして猶ほ且つ生命ある文字たるを失はなかつたのである。我輩はくれぐれも竹風の爲に是れを惜しむ。

○近刊の多くの小説の中で、永井荷風の『地獄の花』は儘に出色の文字であらう。素より缺點の數ふべきものが無いでは無いが、この缺點は青春の活氣に伴ひて、一面其の長所と離れがたきものなることを想へば、むしろその愛すべきを覺ゆるのである。總じて全篇の文字活氣に充ち、其の筆の尖には青年の熱き血汐が紙背を徹して滴つて居る。わか／＼しいと云ふ批難もあるであらうが、このわか／＼しい處にあらゆる將來の希望が籠つて居るの

である。我輩は是れまで多くの青年作家の著述を読まれたが、是の『地獄の花』に於て初めてまことの青年らしき情熱と意氣と才思とを認め得たのである。

○著者は是の『地獄の花』に於て一種の主張を言ひ表はさむと力めたるは明らかなる事實である。我輩は決して是れを批難するものではないが、世上の凡庸作家に往々見る所の如く、唯、是の主張を發揮するに急なるが爲に、他方に於て人物事件の上に有害なる拘束を加へたるの弊が現はるゝに至つては、甚だ好ましからざる事と云はなければならぬ。著者は言ふまでも無くゾラの作に精通せる事であらう。彼は一種の主張を以て其の筆を執つたものであるが、其の所謂主張なるものが具體的事相を假らずして赤裸々に紙上に陳述せられたる如き場合は決して無かつた。況して是の主張の爲に性格もしくは事件の自然的開展を犠牲としたる如きは想ひもよらぬ事であつた。彼れが其の小説を作る時は、其の眼中には人物の性格と境遇との二つあるのみ。是の二つのものが交錯貫通して初めて小説的事件の開展を見るのである。所謂主張は彼れ自らの人格に存するが故に、故らに之を言ひ表はさずとも、其の觀察の中に、其の文字の中には、たゞ其の全體の精神の中に、おのづから發揮せらるゝのである。斯くして

一面に於ては能く自然主義の旗幟を打立つると共に、他面に於ては又能く理想主義の幟幟を掲げ得たのである。我輩は荷風君が是の事を一考せむことを希望する。

○『地獄の花』は其の主張を言ひ表はすに於て餘りに赤裸々であつた。是の主張の骨が目立つに随つて自然の皮肉は如何にも瘦せ衰へて見ゆる。自然主義はあらゆる理想を包容しても決して狹隘を感すべきものではない。我輩は『地獄の花』に於て慥に著者の最も有望なる將來を認識するが故に、ことさらに是の苦言を先づ批評の辭に代ゆるのである。

○近來我邦の批評家の中には頻りに魯西亞文學排斥の聲を揚ぐるものがあるが、我輩には一向其の理が解らない。

○今日トルストイは老耄して居るかも知れぬ。如何にもドストエフスキーは癡癡病者で、ゴルキは浮浪漢であつたとしても、其の文學をば何故に排斥せむとするのであるか。吾々は聖書として文學を見るの要は無い、唯、一部人生の批評として吾人の精靈に安慰と希望を與ふる一句半句の文字だにあるならば、尙ほ取つて吾人の糧とすることが出来るのである。

○十九世紀の文明がトルストイを産むが爲に如何なる高價を拂つたか。吾人は是の偉人を言ふ前に、先づ是の問題を熟考しなければならぬ。彼れの主義を是非し、彼れの行爲を批評するは極めて容易の事である。然しながら其の『懺悔録』と其の『吾宗教』とを讀みて、是の偉人が身讀體達したる人生の経路の如何なるものであつたかを考ふるならば、吾人は肅然として自ら畏るゝ所無きを得ない。

○ゴルキを罵りて野獸の如く卑しむ人があるが、彼れはゴルキに於て果して何物を見たのであるか。ツェルカッセや、ボシヤツクに於て所謂浮浪主義の權化を見たるの故を以て、彼れは爾かく吾人に忌み嫌はるべきものであるか。あゝ所謂批評家の鑑識は何故にかくまで狭少であるか。

○吾人は文明の批評家として其の所謂浮浪主義に大膽なる發聲を與へたるゴルキを偉なりとするものである。十九世紀文明の大なる缺陷の一つは是の發聲によりて人々の胸中に明白なる自覺を喚び起したのである。古人の言へる如く、明ひは多くの場合に於て救ひである。すれば、人々はゴルキを咀ふ己れの聲によりて自ら救はれつゝあるのである。

○況やゴルキの作は、今の我邦の無學なる批評家の雷同する如く、罪惡浮浪の外に何物をも語らざる様のもでは決して無い。若し欲するならば、我邦人の如きは是れによりて多大の教訓と箴規とを受くる事が出来る。

○ブオーマ・ゴルデエフに描かれたるマヤキンの人生觀の如きは、我邦人の大多數にとりては殆ど理想に近いものであるかも知れぬ。若し彼等にしてそを一讀するならば、ボシヤツクやツェルカッセを描いたる同一の人が、如何にして是の如き人物を寫し得たるかを驚かすには居られまい。ゴルキは決して無學者では無い。活ける人生の知識に於ては如何なる文豪詩人とも匹敵し得べき深大なる素養を有して居る。

○試に見るが好い、ヨッホーフやルホフを通じて彼れが發表したる人生の批評は、今日の最高の知識に對して何等の遜色を認めざるものではないか。フオーマは或は彼れ自らの性格を現はして居るかも知れぬ。然しながらゴルキ其の人の知解は當代思想界の最高潮を示して居るものと見て決して大過なきことを我輩は信する。イリヤ、ムロメツの甲板の上で、商賈の團體を指して生命の破壊者と罵倒したるフオーマは、最早や知解の人に非ずして本能の人

である。ゴルキが現代文明に對する大いなる反抗の氣焔として其の所謂野獸的性欲の自由を發揮したのである。吾人若し彼に於て得る所あらむと欲せば、彼れの長所の那邊にあるかを先づ考へなければならぬ。

○早稻田の専門學校もいよく先月より大學と改名した。名前は一枚の看板で如何様にも懸け換へることの出来るものであるが、唯、憂ふべきは名前に稱ふだけの實質である。我輩は早稻田大學當事者の功勞を多とすると共に、是の大學の前途に對して少からざる憂を懐くものである。

○今の我邦に於ては、書物の標題に新と云ふ字を附けなければ賣れ行きが悪いといふことである。大方其の爲であらう、倫理新説とか新教育學とか最新經濟學であるとか云ふ様な標題が新刊の書には頗る多い。甚しきに至つては、新式佛敎講義などと云ふ書目さへ見ゆるのである。

○あゝ新らしい物は左程に貴まるべきものであるか。眞理は古いものであるとこそ聞け。何事も皮相の新らしきに走りて珍奇是れ喜ぶは、畢竟其の學風の輕佻浮薄なるの致す所である。實に歎かほしき現象と謂はなければならぬ。

○あらゆる學術は常に奴隸的のものである。問題は常に外より與へられる。彼は是の與へられたる問題に對つて解釋を提供すれば、それで好いのである。

○問題の提供者は時として自然である、又時としては天才である。學術は常に是の二者の何れかの奴隸である。

○迷信は世人が騒ぐほど左程怖るべきものではない。むしろ怖るべきは道學先生の固陋なる道徳説である。基督を十字架に上せたのも、ソクラテースに鴆毒を飲ませたのも、スピノザを迫害したのも、乃至はシヨベンハウエル、ニイチエを苦しめたのも、皆是の道徳説の爲せる業だ。

○昔は犧牲は少數の偉人に限られたが、今や多數の凡人が是れに代ることとなつた。彼等

に口無きが故に世は平和に見ゆれども、實は死滅に近づきつゝあるのである。

○迷信は力である。ダンバーの戦を、人が出来事と言つたのに對し「是れ人事に非ず神事也」と怒りたるクロムエルは、恐らく當代第一の迷信者に相違無かつたであらうが、其の事業は天日と共に輝けるのである。日蓮は三災七難の佛讖を叫んで一世を警しめたが、今日の學者などの眼には是れ程大いなる迷信者は無からう。然しながら是の迷信の上に打立てられたる彼れの事業の如何ばかり偉大なりしよ。

○我輩は斯う思ふのである。迷信と云ひ、眞信と云ひ、つまりはどちらでも好いので、唯、必要なは精神である、赤誠である、不惜身命の大勇猛心である。

○今の人は祈ることを忘れた。是れこそは今の世の最も大いなる禍と謂ふべきであらう。

○大いなる人となるの道は唯、二つあるのみである。己れの小ささを悟るは其の一つである。己れの大きいなるを信するは他の一つである。前者は情により、後者は意による。彼は攝受門、此れは折伏門。彼れは易行道、是れは難行道である。彼は釋迦基督の教義にして、此れは奈破翁、ニイチエの信條である。

○人を脱して神となる、己れの小ささを悟る所以である。人のまゝにして神となる、己れの大きいなるを信する所以である。

(明治三十五年十一月)

——樗牛全集拾遺(了)——

增補 楞牛全集第五卷(終)

大正五年三月一日印刷
大正五年三月四日發行

編者

姊崎正治

同

畔柳都太郎

同

笹川種郎

同

藤井健治郎

發行者

東京市日本橋區本町三丁目八番地
大橋新太郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地
高橋季吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地
博文館印刷所

發行所

東京市日本橋區本町三丁目

發行所

東京市日本橋區通四丁目

博文館
春陽堂

增補 楞牛全集第五卷

定價壹圓五錢

不許複製

高次郎君遺著
齊藤學士編

櫛牛

卷壹第

美學及美術史

△美術上の研究：美學上の思想に就て○美感に就ての觀察○月夜の美感○詩歌の所縁と其對象○日本畫の過去及將來○歴史畫の本領及題目○坪内先生に與へて三度歴史畫の本領を論ずる書○「審美綱領」を評す○壯美及優美○外界の美○自然美○日本美術史未定稿：日本美術の特質を論ず○奈良朝以前の美術○天平時代○平安時代

卷貳第

文藝及史傳 上卷

△文藝評論：文學及人生△近松巢林子△運命と悲劇△歴史的精神外十一目△雜論：文學會漫評△青年文人の眼世觀、其他三十四目△批評家の本領、明治の小説、其他十五目△齋藤綠雨の色道論を讀む、其他五十三目△文明批評家としての文學者、作文論、其他十二目。

卷參第

文藝及史傳 下卷

△釋迦△平相國△菅公傳△史傳雜纂：南歐美術譚、ナポレオン三世、古事記神代の卷：神話及歴史、ジャンヌダルク・ハイネが事、東北物語、世界の四聖、冠鑑日記、豪傑の平生、予の好める人△文藝評論：戯曲に於ける悲哀の快感○日本民族の特性と文學美術○吾が文學

全集

全部五冊
大判特製
總洋布
金文字入
正價每卷
四圓五拾錢
送料各十二錢

卷肆第

時勢及思索

界に於ける道德的傾向○古寺院の寶物○人才と我文學界○美術に對する購買力○西郷南洲の銅像を評す○外二十四目
△(倫理問題研究の時代)：人生終に奈何○厭世論○道德の理想を論ず○島國的哲學を排す外十目○(國家主義の時代)：日本主義○日本主義と哲學○世界主義と國家主義○宗教と國家○我國體と新版圖○自殺論外二十四目△(雜篇)歴史と人類○成敗と正義○基督教徒の逢迎主義○士の徳操外八十目△(信仰覺醒の時代)美的生活○日蓮上人とは如何なる人ぞ○日蓮と基督○吾が好む文章外八目△(雜篇)笑はむ乎狂せむ乎○口耳學○空腹高心外五十目

卷伍第

想華及消息

△瀧口入道(歴史小説)△感想：吾妹の墓○戀情論○故郷論○雪中梅○今様三首○准享郎の悲哀○傷心録○わがそでの記○原積滲發○冷鐵のひびき○送年の辭○秋色○歲暮○思ひ出の記外八目△雜篇：十數項△消息：國元實父○姉崎博士○笹川臨風氏○井上博士○登張竹風氏其他の消息百餘通△外篇△倫理教科書△世界文明史△倫理學及近世美學

博文館發行

編共君四佛愚・風臨・舟芥・風嘲
稿遺君郎次林山高 士博學文

刷縮補增
集全牛樗

- | | | |
|------------|------------|-----|
| 目書冊六部全 | ■ 1 美學及美術史 | 第八版 |
| ■ 2 文藝評論 | 第五版 | |
| ■ 3 史論及史傳 | 第五版 | |
| ■ 4 時論及思想 | 第三版 | |
| ■ 5 華及小 | 新刊 | |
| ■ 6 日想記及消息 | 續刊 | |

洋裝紙乃
特製每九
天製每九
金製每七
綠製每七
六製每十
判頁頁

博 文 館

「樗牛全集」世に公にされてより其多きは二十餘版を累ねるに至り原版處々に磨滅する所少なからず。是に機を得て材料の取捨を行ひ増補訂正し、挿圖を増加し更に携帶便に便ならしめんが爲め之を縮刷となす。樗牛の文と人とは世既に定評あり響として靈光殿の如し、而して此の全集は現代に超越せる這個絶代の巨匠心血の凝れる所なり。されば苟も樗牛の名に憧憬するの士女は必ず此完備せる不朽の大典を蔵せざるべからず。

編君治正崎姊 博士

篇文牛樗
りな人は文

第一期 憧憬の時代
第二期 自信の時代
第三期 煩悶の時代
第四期 信仰の時代
附録 性格の人高山樗牛

全一冊四六判紙數五〇四頁
挿畫數十葉外樗牛筆蹟書簡入 壹圓
情趣恩慕の青年時代より、自信の人、煩悶の人、信仰覺醒の最後に至るまで樗牛氏一代の意氣感情を傳ふべき文章の粹を集めたるもの全集以外の材料と編者の論評とを加へ文に依つてその人を傳ふ『高山樗牛と日蓮上人』と相待ちて、現代超越の主旨を宣揚するは此書にあり。

高山樗牛と日蓮上人

姊崎博士 山川智應君共編

樗牛が一生は日蓮上人の渴仰を以て終れり、上人が上行再現の自覚は、樗牛をして久遠の靈光に接せしめたり、最後の一年間に於ける樗牛氏の信仰と熱血とを集め、加ふるに況後録の註解と、日蓮上人及び樗牛の信仰に關する編者の論評を加ふ、一部日蓮主義の好指鍼にして、又實に樗牛が眞信の告白集なり。

中判上綴紙數四六四頁 壹圓 郵税八錢

上學文國邦本

校註國

校訂嚴密
內容充實
裝幀瑰麗

文學博士 本居 豐 穎 先生
文學博士 井上 賴 圀 先生
文學博士 萩野 由 之 先生
文學博士 關根 正 直 先生
文學博士 池邊 義 象 先生

解註訂校

全部十八册
藤島橋口兩畫伯意匠裝幀
大判總布天金綠堅牢函入
正價各册一圓三十錢
小包料：内地各十二錢

- (1) 源氏物語 附葦草 (E)
- (2) 源氏物語 附紫家 (F)
- (3) 太平記 (E)
- (4) 太平記 (F) 曾我物語
- (5) 保元物語 平家物語
- (6) 竹取物語・落窪物語
土佐日記・徒然草・紫式部
伊勢物語・枕草子・日記部
- (7) 源平盛衰記 (E)
- (8) 源平盛衰記 (F)
- (9) 水鏡・大鏡
- (10) 榮華物語
- (11) 宇治拾遺物語
- (12) 續拾遺記・更科日記・源松中納言物語・とりかへばや物語・月かへばや物語
- (13) 宇津保物語 (E) 附年立系譜
- (14) 宇津保物語 (F) 附狹中納言物語
- (15) 義經九代記
- (16) 今昔物語
- (17) 今昔物語 (F) 古今著聞集
- (18) 神皇正統記・梅松論・櫻雲記・吉野拾遺・十訓抄・大和物語・唐物語・和泉式部日記・十六夜日記

著名的表代の

文叢書

用紙純良
印刷鮮美
註解簡明

本叢書は、現代知名の國文學上の著者碩儒と謀り、我が歴史的文學の代表的名著を彙集し、嚴密なる校訂の下に簡明なる頭註を施し且つ口繪に挿畫に周匝なる注意を拂つて成れるもの全部十八卷、蓋し本邦唯一の國文大文庫たり、苟も我が歴史文學を研究せむとする者の絶好の資料たるは論なく、其印刷の鮮明、装幀の瑰麗、價格の至廉に至りては世既に定評あり、敢て江湖の清覽を俟つ。

行發館文博

文學博士 芳賀矢一先生 校訂
文學博士 佐々木信綱先生 註解

大和建樹先生著
天竺山房刊
昭和六年出版

校註謡曲叢書

本叢書第一卷第二卷に收めたるものは、觀世流の内外二百番を根柢とし、貞享元祿版の外二百番其他各流に亘りての出入を補へるを以て、總計五百數十番に達す。第三卷には、和漢朗詠集をはじめ、宴曲諸集を彙集して、鄂曲の全觀を得せしめんとす。いづれも新に標註を施したれば、江湖初見の善本也とす。

前編二冊 正價每冊一圓三十錢 十二錢
千三百頁

冊三全

冊九全

謡曲評

大和建樹先生は斯道の泰斗として其造詣最も深く、江湖湯仰して其高風を慕ふ。本書全部九冊、觀世流の謡曲約二百五十番を蒐め、各註釋を加へ、總假名を附し、全部を通じて曲名を伊呂波順に並列し、終に語釋の索引を附す、用意周匝、評釋精透洵に斯界の珍本たり、謡曲の道に遊ぶ人の好佩たるは論なく、文人雅客の一本を藏すべき大寶典なり。

大和建樹先生著
菊判和装
紙數每編二六〇頁
正價各冊卅五錢 郵費各六錢

(町本) 館文博 (京東)

45
3164

終

